

新自由主義状況における出版メディアと人文学

小柳 暁子

小林 浩

守田 省吾

司会 岩崎 稔

Ⅰ 提題者の報告

小柳 暁子:私は、昨年8月まで未来社という出版社で編集をしていました。現在はフリーランスとして仕事をしています。私自身、未来社で5年しか人文書の編集に携わった経験がありませんし、人文書専門店であった鈴木書店が倒産する以前の状況も存じません。現在はノンフィクションとビジネス書を作っておりまして、この場でお話してよいのかなと思っております。

さて私の方からは、実際に原稿が本になってそれが流通に乗るまでのお話をしたいと思います。これはこれから本の著者になる大学院生の方々に是非聞いていただきたいのです。苦労してできた本は、うまく売り切ることができればよいのですが、実際には返品として戻ってくることが多いのです。苦心してできた本が在庫となってしまうのかということに関して、みなさんに大掴みなイメージでも持っていただけたらと思います。本日の発表は、大学と人文書の出版社というものは、実はある意味で運命共同体であるにもかかわらず、お互いの内実を知らないままに仕事しているという部分があるので

はないか、と感じたところから作ってみました。

出版編集の仕方は、その出版社の規模などでいろいろあります。ですから、これは本当に大掴みな話です。是非あとで発言される予定のみず書房の守田省吾さんや、フロアーの方々に補足していただきながら議論を進めていければ、と思います。

まず一番最初に企画という段階があります。企画というのは、いただいている原稿を本にするという段階で、編集者が商品としての本のイメージを固めていく作業や、原稿を整理しながらページ数の計算をする作業であろうと思われます。それは、例えば四六判の256ページくらいなのか、A5判の456ページくらいの本なのか、Q数はどれくらいにして詰め込んだらどれくらいのページ数になるのか、ということの意味しています。例えば翻訳であつたら、原著からページ数を計算するとか、1章訳してもらつたらだいたいこれくらいだから、全体でおおよそこれくらいのボリュームになるだろうとか、そういう計算をするわけです。これは、だいたいの直接制作費を割り出すために必要な作業です。

その後に初版部数の予想をします。例えば、同著者の別著作の部数が何部出たか、あるいは似た傾向の類書の部数がどのくらいか、という情報を集め、この著作は何部刷れそうだな、という予想を立て、それで直接制作費を部数で割ります。これによって1部あたりの原価がだいたい決まり、この本のおおよその定価を見定めることができます。ここでだいたい判型、ページ数、部数、定価、あるいはその本のジャンルというものが見えてきて、それによって装丁、製作にかかるコスト、流通の流し方、想定読書層、販路などがイメージできるようになります。こうして具体的な本の製作販売過程が決まってくると、編集会議ないし企画会議にかけます。ここで営業担当者などの意見を聞きながら企画を検討し、場合によっては助成金を申請するなどといったこともふくめて、刊行に向けた条件を整えていきます。

この助成金というものは、主としては日本学術振興会の「科学研究費補助金研究成果公開促進費」、いわゆる「学振」を取ることです。しかし、この採択率が減って、いまではなかなか通らなくなりました。また、3社の合見積りを取るだとか、今までは著者の個人が申請していたのを、所属機関から申請しろだとかいうことになって、実際助成を出す方の現場である大学の事務も、極端に混乱しています。

とにもかくにも、それでめでたく企画成立となりますと、次には翻訳であれば版權を獲得す

るというプロセスがあります。この時に、版權交渉の代理店であるエイジェンシーとの関係があります。これは例えばイングリッシュ・エイジェンシー、フランス著作権事務所、酒井著作権事務所というような、著作権エージェントの方々を通して、場合によっては原著者に直接コンタクトをとる方もいらっしゃいますが、その本の権利状態を確認して、希望契約条件を提示します。それで契約書を作ってサインを交換し、前払い金を支払うというプロセスがあります。

この版權に関する契約の中には、契約時から18ヶ月から24ヶ月の間に刊行してくださいという条件がありました。翻訳に5年も掛かってしまう本というのは普通にありますが、この条件期間を過ぎるともう1度お金を払わないといけないこともあります。たまたま版權の取り合いになるような本もありますが、そういう本はすぐに版權を取らなければなりません。そのときは、すでに着手しているその本の翻訳の進捗状況とにらめっこしながら、版權取得のタイミングを調整しなければならないこともあり、割と気を使います。

翻訳書であれ、著作であれ、企画などが通って完成原稿を作成して頂いた後に、原稿整理をします。ここではだいたいの構造を見て、これは全部で何章何節ある本であるのかを確認し、内容を点検していきます。例えば翻訳の本であったら、訳し飛ばした部分などはないかとか、強調部分はちゃんと強調されているだろうか、

ということを原著と一緒に読んで確認します。そして引用部分があれば原出典に当たってチェックする、図書館にこもる、という作業をします。

それで原稿ができますと、入稿となります。この入稿で印刷所さんとの関係が始まるわけですが、入稿するときにはまず組体裁という指定書を作ります。版面は天から何ミリ、小口から何ミリ、のどから何ミリと指定して、天地何ミリで左右何ミリにしてくださいとお願いします。また、本文は 13Q とか 12.5Q とか指定します。そしてテキストデータをつけて入稿します。今は編集者の方で組版を自分でなされる方も非常に多くいらっしゃいまして、そういう方は印刷所ではなくて自分でこの作業を終えられます。

印刷所の営業さんは、原稿やデータを見て、組版指定の確認をし、スケジュールの策定をして、機械の予約をします。本を刷るための機械の予約取り、見積書作成、資材の手配などは、印刷所の営業さんがやってくれます。この時、製作の過程としてはゲラの段階ですが、製本に向けて印刷所さんも機械をちゃんと予約して待っていてくれています。ここでスケジュールが狂うと、印刷所の営業さんもいろいろ走り回らなくてはならないことになるわけです。

印刷所さんの手配が終わると、スケジュールや見積書の確認をします。この工程の辺りで原価計算して、最終的な定価を割り出します。定価の確定は、場合によってはかなり前後するこ

ともあります。初稿を印刷所に入稿しますと、少しして初稿のゲラが帰ってきます。現在は印刷所さんがみな都内でゲラを組んでいるというわけではないので、このゲラが帰ってくる期間はまちまちです。ゲラが届くと編集で校正をし、その後著者に校正を依頼し、それが終わると印刷所に戻して、何校かとして校了します。

ここまでは著者とやるプロセスなので、皆さんよくご存知だと思います。このゲラが出た頃、装丁の依頼をします。装丁のデザインの仕方はデザイナーさんによってかなり異なっています。ゲラをととても丁寧に読んでくださる方もいれば、こちらから言ったイメージを聞いてバーっと書いてくださる方もいたり、と色々です。この場面ですら帯のコピーなどを作りまして、この写真を使ってくださいというようなやり取りをしながら、デザイナーさんと打ち合わせをします。このデザインが決まると、印刷所に入れます。装丁は編集者の方が手がける場合もありますね。

いよいよ校了になると、資材の手配をします。本を作るために必要な、用紙やスリッスを発注をするわけです。ここで何ページの本を何部作るためには、何枚の紙が必要とかいうことを細々と計算しまして、四六判の 256 ページの 1500 部の本であったら、四六の全判が 6000 枚必要で、予備が 1000 枚ほど要るであろうとか、そういう計算をします。それで印刷所さんや紙屋さんが動いてくださって、必要な印刷が行われるタイミングで紙が入る、ということになり

ます。

印刷の工程では、印刷所の方で今までは見開きの形のゲラになっていたものを、16 ページで片面の面付けをします。面付けとは、1 枚の大きな紙を折っていったときにページが通るように並べることです。この面付けをした状態でプリントしたデータを白焼きといいます。最終的にこれを編集がチェックをして、校了ということになります。校了したら印刷所さんは、刷版（さっぱん）と言う形でアルミ板にそのデータを焼きつけて、印刷機にクルッと巻きつけて印刷をするということになります。

印刷が済むと、今度は製本というプロセスに入ります。1 枚の大きな全判の紙に片面 16 ページ、両面で 32 ページ分印刷したものを折って、帳合をして綴じ、さらに裁ちます。これで背の以外の部分を裁って、ページがパラパラとめくれる形になるわけです。そして、50 部か 100 部くらい見本を作ります。この何部かを出版社に持って行きまして、見本をその出版社の営業部員や編集部、または取次ぎに持って行って配本部数の相談などをします。そうするとそれぞれの取次ぎから、注文の部数が出てきますので、その部数を出版社から伝えと、その数だけの本は、製本所から直接取次ぎに入っていくのです。そして残りは、出版社の倉庫に入り、この先は流通の話になります。

以上が、原稿から本の形になるまでのざっとしたプロセスです。流通から先の在庫管理の所

までは、営業のプロであり、月曜社をご自分で立ち上げられた小林浩さんから説明をいただきたいと思います。

岩崎 稔：じゃあバトンを小林さんに。

小林 浩：月曜社の小林と申します。よろしくおねがいします。92 年に早稲田大学の第一文学部を卒業いたしました。出版社に入りたかったのですが、全部落ちてしまい、就職浪人をいたしました。この期間出版社でアルバイトをさせていただきまして、最終的に 93 年 1 月から未来社の営業部員として正式採用されました。その後、哲学書房の編集部に移りまして、更にその後に作品社という出版社の営業に戻り、それで 2000 年の 12 月に作品社の編集だった神林豊と 2 人で月曜社という出版社を設立いたしました。主に人文書、芸術書等を出しております。今日の話の趣旨は、本を作られるまでに多くの煩雑な作業が裏舞台でなされており、また多くの人々が関わって初めて 1 冊の本が読者まで届けられるということ、この業界を知らない方にお伝えしたいということです。

私は、主に出版社の営業の仕事、つまり本屋さんで本を売っていただいて読者の手に届くまでのお話をさせていただきます。主体としては、出版社の営業部員あるいはフリーの営業、そして営業代行会社を想定しています。作業としては、校了間際の頃、あるいはもっと早い出版社もあると思うのですが、新刊の受注を本屋さん

から取るために注文書を作ります。それは版元によりませんが、だいたい編集が作った企画書を元に営業が作るか、あるいは所定の文章を短くまとめて編集に紹介文を書いてもらう、という風になります。それで、本ができるだいたい1ヶ月前、あるいは早い所ですと2ヶ月くらい前から受注活動を開始します。

営業部員は、例えば編集者が作った注文書をちゃんと読みますが、実際に書店の担当者の所に伺って営業をするときには、注文書の文言を話すということは、絶対にしません。というのも、1冊の新刊について、書店員さんにその本のだいたいの性格を理解してもらうために確保できる時間は、30秒も無いかもしれないからです。ほぼ一瞬で理解してもらう必要があります。編集の方がご存知の本の意義という膨大な情報は、そのとき営業部員によって、わずかに数語にまとめられるわけです。うまくその数語にまとめられるか否かということが、その営業部員の腕の見せ所です。だから、著者先生や編集の予想だにしないところから、本屋さんには必ず通じると思われるその本のポイントを、言わば殺し文句的に書店員さんに伝えて、数秒の間に判断してもらいます。それで、じゃあ5冊下さいとか、多い場合だったら30冊下さい、というように注文をいただくわけです。これは、ほとんど剣道というか、居合いというか、刹那の判断が勝敗を決するような世界です。というのも書店員さんは、皆さんご存知のように、棚への本

詰め、接客、電話対応、レジ打ちと、ほとんど1日中忙しく動き回ってらっしゃいます。

書店さんへの営業活動について、具体的なことをお話ししたいともいます。全国の書店数は目下17000店から18000店ですが、月曜社の場合新刊の案内をするのは、その内300店くらいだけです。人文書や芸術書の売り場がそれなりに存在しているお店はだいたいそれぐらい、とお考えください。その300店への営業活動ですが、月曜社の営業部員は私一人だけですから、とても全部は回りきれません。そこで新刊情報はファックスで送信します。実際ファックスを300店に流すとどうなるかということなのですが、最近出した文芸書Aでは、そのうち60店が応答してくれました。そして60店からの注文がトータルで300冊です。その300冊を元手にして、取次会社、例えば大手ではトーハンや日販、中堅所で大阪屋、栗田出版販売、あるいは太洋社、そういうところの窓口を持って行きまして、取次を通じて本屋さんには本を撒いていただく配本ということをお願いします。この場合は、300冊の注文を元手に結局は470冊配本いたしました。

月曜社は人文書が一番多いのですが、このAのような文芸書とか、芸術書も出しています。月曜社というブランドイメージの中で一番注文がとれるのは、一番出している人文書のカテゴリではなく、実は芸術書のほうなんです。森山大道という写真家との付き合いがあったりし

ますし、音楽書、音楽系の評論も、月曜社の中では非常に実績がいいんです。例えば芸術書 B は、300 店に案内して 120 店から回答がありました。文芸書の倍です。この 120 店から発注があつて、950 冊の注文が集まりました。それを元手に取り次ぎと交渉して、1200 冊撤きました。

それではお待ちかね、人文書はどうなるかということですが、これは文芸書と芸術書のちょうど中間くらいです。300 店に案内したところ 90 店から回答が来て、注文のトータルが 400 冊、それを元手に 600 冊撤きました。だいたい法則化して申し上げますと、注文を元手に、その 1.5 倍くらいの配本ができることになっております。版元によっては、全ての本を事前受注したお店にしか配本しないという版元もあります。主に「買い切り」の版元です。具体的には岩波書店とか未来社とかです。逆に受注がなくとも、全部取次ぎに任せるといふ版元さんもいらっしゃいます。

次に、取次会社についてお話しします。一般読者の方にとって一番分かりにくいのは、この取次会社というシステムだと思います。ここまでは、取次の機能のなかで、本を配達するという機能に触れてきました。版元と書店の間の本の往還、つまり納品と返品という物流で、取次は大きな役割を果たしています。しかし、取次会社の一番重要な機能は、言ってみれば金融機能、つまり銀行のような役割です。例えば月曜社の場合には、主要取次とは取引があります。なか

には、書店と直取引をしているような出版社、それも直取引だけでやっていて、取次に頼らない出版社もありますが、直取引だけで本屋さん和やりとりをするととなると非常に手間がかかります。取次は、書店さんからの代金の回収を全部束ねてくれています。もし、取次を介さず、直取引で多くの書店さんと取引をすると、全ての本屋さん、1 店ごとに納品から代金の回収までを個別に取引することになってしまい、非常に手間がかかります。ですから、版元はどうしても取次に依存せざるを得ません。

さて、取次を介して本屋さんへ本が届きます。本屋さんでこの本がどうなっていくか、ということに話を移していきたいと思います。例えば、ある書店員さんの 1 日を見てみますと、9 時に出社、23 時半に退社です。すごく長いな、と皆さんお思いになりますか。ですが、これは、店長または役付きになればごく普通のことです。

普通の一般社員、あるいは嘱託社員、パート、アルバイトは、大書店の場合ですと、現在は早番、中番、遅番という三交代制でやっています。90 年代以降、本屋の営業時間が延びました。それまでは 6 時までだった営業時間が 7 時になり、8 時、9 時となって、とうとう明け方までやる所も出てまいりました。この営業時間延長が何をもたらしたのかを、ぜひ 1 つお伝えしておきたいのです。リブロという本屋さんがあります。これの西武池袋店というのは、リブロの基幹店になりますが、80 年代くらいまでは西武百貨店

が閉店するとともに閉まっていた。6 時で閉店すると、そこにいた人文書の担当者は、シフト制とは違ってみんなで一緒に上がって揃ってどこかへ行くんです。みんな上がる時間がバラバラですと、一緒には行動できない。当時リブロの池袋店は人文書の牙城でしたから、例えば6時に上がったらみんなで課長以下そろって吉本隆明さんのお宅に話を聞きに行くということもやっていました。しかし、90年代以降、平成不況、出版不況といわれるような時代に入ってから、シフト制が導入されるようになり、書店員さん同士の交流や団結がほとんど難しくなっています。

書店員さんは本当に朝から晩まで、品出し、棚の整理、接客と大忙しで、腰を悪くして辞められる方が若い方に多いのです。そういう厳しい労働状態が生まれています。現在毎日約 300 点の新刊本が出ていますが、大書店であればその 300 点をほぼ丸々毎日捌かなければいけないという過酷な状況です。書店の棚の規模はもちろん有限ですから、その 300 点に押されて、人文書でも売れ行きのいいものを除いて、売れ行きの難しい本がたいてい1週間くらいで見切りをつけられて返品されてしまいます。棚に1冊残されるというのはまだいいほうで、3ヶ月以内は自由に返品できるという委託期間のうちに全部戻っていきます。毎日毎日膨大な量の本が入ってくるので、どんどんトコロテン方式で返品されていくんですね。

本屋さんに存在しない本はだんだん忘却されるという傾向にあります。市場に存在しない本イコール本当に存在しない、というわけで、記憶からも抹殺され、そもそも存在しなかった本と同じことになってしまうんですね。ですから、営業マンは既刊書を何とか売ろうとして、ブックフェアを仕掛けたりして、色々がんばっています。

大量の新刊に押されて、出版社には大量の返品が取次を介して戻ってきます。返品されてきた本は在庫となるわけです。最後に在庫管理についてお話ししたいと思います。自社の設備だけで全部の商品を在庫管理している版元というのは、いまはほとんどないでしょう。月曜社の場合には 100%倉庫会社に委託しています。納品も、倉庫会社から納品され、返品も倉庫会社に戻ってきます。私達の事務所には本は置いていないんですね。1冊くらい見本としては置いてはありますけども、それ以外にはない。その倉庫会社で働いているのは、パートやアルバイトの主婦が多いでしょう。このひとたちの手で、倉庫に返品として帰ってきた本は改装され、きれいになります。カバーや帯を付け替えたり、あるいは並製の本は天地、小口を研磨機にかけて、きれいにしたりします。文庫本は、再出荷されるときに研磨されます。小口に削られたような加工の跡があるのは、それは改装された跡です。何度も納返品と改装が繰り返えされて、カバーよりも天地が短くなってしまった本に、

皆さんも出会ったことがあるかもしれませんね。

本はこのように循環しています。買い切り版元の場合には、返品というのはほとんどないのですが、買い切りでない版元の場合には、納・返品をずっと繰り返します。この在庫管理で過剰在庫と判断された本は、断裁されてしまいます。出版社ないし倉庫会社、本屋さんもそうなんですけれども、毎月毎月棚卸をして在庫状況を確認し、主に決算のために在庫評価をしなくてはなりません。非常に辛い処置なんです、ここで売れていない本は断裁しなければならなくなります。

月曜社の場合は、自社のものは断裁したことはありませんが、発売元として引き受けている、発行元が別の会社の本は、断裁したことがあります。これはこの本の売り上げが、倉庫会社に支払う管理料より低くなったためです。この時、発行元に「このままだとずっと赤字で、こちらから売った分をお支払いするのではなく、逆にお金をいただく形になります」とお伺いしました。発行元の皆さんも本意ではなかったでしょうが、結局はそれは困るから切ってくれ、といわれて断裁しました。売れない本はその他の売れている本に何とか支えられていて、それで出版社の経営というのが成り立っているというのが実態です。一昔前は、大手版元と言われるような出版社は「雑誌で食って、書籍で損をする」というようなことがありました。ところが最近雑誌も売れなくなっているのです、ますます

業界の状況は厳しくなっております。

決算の際の在庫評価は、編集者の皆さんにとってはとても辛い、営業マンにとっても辛い。本当はこの本を残したいけれども、これを切らないと自分たちの会社が危ない、経営自体が危ない、というものに関しては泣く泣く断裁するわけです。「切るんだったらもっと売ればいいのに」と仰るかもしれませんが、なかなかそうは行かないから切らねばならないのです。辛い話で終りましたが、うまくこれからのリアルな話の続きを守田さんが引き取ってくださると期待して、交代します。

岩崎:ありがとうございます。では守田さん。最後をお願いします。

守田 省吾:みずず書房の守田省吾です。ここまでの話に歴史的な視点を交えながら、「新自由主義状況の出版と人文学」という本日のテーマに即してお話をします。それで、うまく質疑応答につなげられる役割ができればと思います。

いま小林さんから、毎日 300 冊というお話がありました。他の企業でも同様かもしれませんが、かつて出版社は成長産業といわれていました。それが、1996 年から下降してきています。しかし、出版点数はどんどん増えていきます。1990 年頃には年間 4 万点だったのが、18 年経った今日、点数として言うとも年間 8 万点に近づいてきている。これは雑誌を除いた数ですから、先ほどのお話のように 1 日に 300 点が本屋さん

に届けられているということが起こっているわけです。

しかも、書店の限られた広さ、限られた展示場所で、書店員さんは大変忙しく働いております。これはときどきある話ですが、ダンボールから出して本屋に並べられることもなく、展示もされないまま、返品されてしまうという、いわゆる「即返」(そくへん)という事態も起きてきます。例えばみすず書房でも、納品して僅か1週間で帰ってくるがありますが、みすず書房は自前の倉庫を持っていますから、ぼくはそれを確認することが一応出来るんですね。「なんだもう返してきやがった」みたいだね。

しかし、先ほどの例にもあるように、共同の返品倉庫などを使っておられたり、またはもっと大きな会社になれば、編集者はなかなか返品を見ないこともあります。せめて図書館などに入ればよいのですが、自分の本を作ったけれども、展示もされないまま、自分たちが届けたいと思った人に届かないまま、つまり書店の展示のないまま終わってしまう、それこそ記憶にも残されない本があることになります。出版点数は増しているのですが、これは出版業界全体でもみすず書房でもいえる現象ですが、売上額、つまり出版としての総売上額およびその総部数が、かつてに比べてどんどん減っています。仮に年間8万点を出しても、4万点の頃に比べて、総額も部数も減っています。だから、現在の出版社は自転車操業状態にあるのです。

書店の立場から見て、どう展示すれば儲かるか、と当然考えます。図書館的な大規模書店はさておいて、例えば人文書の本を置きたいと思っても本が売れなかつたら食べていけないわけだから、多くの書店は、取次ぎの指導を受けて、入口にはこういう本を置けばいい、とかいう形で毎日計算しているんですね。売れる本をどう展示するかという発想になってきたのは、やはり、この10年くらいでアメリカの書店の影響が大きい。

日本で一番分かりやすい例は、『ハリー・ポッター』の売り方ですね。つまり、バラバラの売れるか売れない本を500冊置くよりは、『ハリー・ポッター』を500冊ドンとおいたほうが売れるに決まっているわけだから、そういう形で展示するようにしている。そうすると必ず利益は上がりますから、やはり書店さんもこの手法でいこうということになる。だから、そこから排除されていくものが出ます。人文書や純文学の本は圧倒的に排除されていって、納返品を繰り返して、そのまま断裁に進むのも出てきています。

この1年で、いま述べた展示の仕方では一番売れた本というのは、例えば坂東真紀子の『女の品格』という本だといわれています。数年前だったら『バカの壁』という新潮新書の養老孟司の本です。1位はこのようなひとたちですが、出版業界全体からいうと少々異なります。大沢在昌、宮部みゆき、京極夏彦という3人、名前

はご存知だと思いますが、新刊だけでなく、彼等3人の既刊書を含めた全部の売り上げが、たぶん出版社の全売り上げの半分は優に超えているはずだと思います。アメリカでの同様の例では、数年前からスティーヴン・キングなど、その数名で全売り上げの80%とかを占めます。ですから、極端に言いますと、年間8万点出しても、79500点ぐらいの本があまり利益に貢献していないということであるかも知れない。それが今の書店を巡る1つの状況なんですね。

書店の数は、例えば1980年から2000年くらいの間が変わっていません。2万店舗くらいをいったりきたりしていますが、実はこの期間、この2万店のうちの半分、1万店が廃業しているのです。そして、その分1万店が増えているんです。例えばこれは、町の喫茶店がスターバックスになり、酒屋がコンビニになるのと同様のことです。町の本屋さんで弱いものは潰れて行って、そこにチェーン店というシステムが入っていく。そうした変化が進行しています。このようなシステムの書店では、本の置き方にせよ、上からの指導があります。ぼくらが育った時代は、いい本屋というのは自分の個性で棚の並べ方も考えていました。ぼくはずっとそういう本屋で本の関連性を見ながら育ってきて、こういう仕事に就いた人間ですから、書店の展示という非常に重要な空間がなくなってくる状況は、これからの人が本屋の棚から学ぶということを考えた場合は、大きな喪失です。アマゾン

コムの場合、本の横の連関が視覚的に見えません。

このような本屋を維持することすら難しくなってきたという現象と同じことが、われわれ出版社の側でも起きています。例えば安価な新書と高価な専門書への分化です。新書の中でも単に消費の欲望に応えるものだけではなく、『生物と無生物のあいだ』なんて本はぼくでもおもしろいと思うし、集英社新書でも素晴らしいものがでることもあります。一般には、これは新書に代表される消費欲望型の安価な本の生産に比重をシフトしている。それと同時に、高価な研究書を少数で出すという傾向が平行して存在します。例えば人文書や学術書が、本屋さんにも納品しても即返になるようならば、部数は少なくともとにかく世に出して、それをきちっと図書館や研究室に高価格でも買ってもらおう、と考えるのです。業界全体で、このような二極的分化がおきています。高価な専門書の出版は、著者の書き記したものの、編集したものを世に問おうという意味では、たしかに立派な行為で、それは公共財になります。しかし、編集者としては、その本が誰にも読まれずに図書館や専門の研究室に所蔵されるというだけなのであれば、そういうものは作りたくない。安価な消費欲望型の本と高価な公共財の本の中間にあって、自分のお金で買える、普通の本。本屋さんは、かつてはこうした普通の本を連関させて紹介する機能を持っていました。これこそ、我々を育て、

文化を作り、時代を啓発し、現実を批判することと繋がる一番基本にあったことでした。現在の出版情勢では、このような普通の本を作りづらくなってきています。

こうした事情をみすず書房の事例を使って具体的に示したいと思います。ぼくは、みすず書房に1980年代の前半に入社しました。当時のみすず書房は、規模は現在と同様で20人ほどの社員がいましたが、年間新刊件数は50点位でした。90年代のころ、そろそろ新刊60点くらい作らないと困るというようになってきたのですが、当時一般に出版社は新刊と、既刊書で食べていました。だから、新刊本の少なかったみすず書房の場合、既刊書のロングセラーで稼いでいた比重が大きかったわけです。80年代まで、みすず書房の利益は、新刊で3割に対して、既刊書7割と大きく、そう急いで新刊を作らずともなんとかやっていけました。

しかし、70年代の終わりに大学の進学率が40%を超え、ぼくが入社するちょっと前の1980年くらいからいわゆる「教養主義」が崩壊してきて、本のあり方が変わってきました。加えて90年前後に冷戦構造が解体しました。冷戦構造下にあつては、本の世界においてもつねに対立構造があつて、ある意味ではいい影響を与えていました。例えば権力と反権力の対立構造が、根源的、視覚的に分かるようになっていました。かつては丸山真男と吉本隆明に代表されていましたが、アカデミズムが確固として存在

していたときには、それに対するアンチの立場があることが、本屋の展示にもよく表れていました。常に対立構造的な中でお互いが批判しながら、ともかくやっていくというあり方から、ぼくらは中学や高校の頃より刺激を受けてきました。しかし、こうしたことは、80年代、90年代に徐々に失われます。アカデミズムそのものも、アカデミズムも反アカデミズムもなくなってしまった。カウンターカルチャーも、かつてと違って、ただオタク的なものになりさがってしまう。だから、対立構造が時代状況の中で見えなくなり、均質化、一元化が進み、あげくの果てに、本が売れなくなってまいりました。

今はみすず書房の編集部も年間出版点数を増やしていますが、売上げ額や部数は減っています。加えて、そういう風に本を作ると、当たり前だけでも企画が甘くなる。しかも部数を絞るから値段が高くなる。それにロングセラーが減る。ぼくがわりと好きだったような、特定の読者を定めない境界横断的な本、つまり色々な分野の人がなんとなく収斂していくという、専門書と一般書の間にあるような本が、このごろは極端に読まれなくなってきました。最近読者を特定した実用書的なものが相対的によく売れています。例えばこの5、6年だったら、河合隼雄が臨床心理士の資格に関係する本を出すと、めっちゃくちゃ売れました。本当は、今すぐ読まなくてもいい本というのが実は一番大事なものであると思うのですが、そういう本は売れない。

とにかく読者がはっきりした本に注目しなければならぬというのは、いいような話でいて、実はよくない。それはある意味で閉鎖性につながりかねません。

さて、先ほど小林さんが取次ぎの話をされました。日本の場合、明治 20 年代、1880 年代に「出版社—取次ぎ—書店」という、近代の流通システムが形成されています。そのシステムは全国津々浦々にまで広がり、その後、戦争中には出版統制のために統合されます。そこで日配という 1 つのシステムに特化され、それが後に、東販日販に継承されて、現在に至るのです。要するに、百数十年経ってもいまだに出版業界は全く同じシステムの中にあるわけです。これはずっと手を付けられないままやっています。だから、次のシステムというのは簡単には出来ない。

さらに、今の社会状況で、我々と同様に苦しんでいる印刷屋さんの現状も取り上げたいと思います。印刷屋さんも、発行点数は増えても印刷する刷り部数が減少する中で、我々のような商業出版社とやっていくだけでは立ち行かなくなって来ました。ぼくらと付き合いのある印刷屋さんは、大学の紀要などをやっています。しかし、大学は限られた予算の中で、可能な限り安くやらせようと恫喝をします。それに、この間耳にしたのですが、例えば地方自治体で市史などを印刷する時に、今まで付き合いのある所に直接依頼するのではなく、数社から見積もり

をとって、そのなかの一番安いところにやらせるわけです。このように、出版にまつわる様々なことにも、新自由主義的な圧力が加わってきています。

先ほど小柳さんが著作権に触れていました。数年前では、優先権という考え方がまだ生きていました。これを具体的にみず書房の例から説明しますと、クロード・レヴィ＝ストロースという著者の本は、昔からみず書房が翻訳していました。例えば、『野生の思考』という本を翻訳出版したのはうちですし、それはずっと売られています。同じ原著者の訳本を数点引き受けて、全部それなりに実益を得ると、原出版社や著者は、「この出版社はちゃんと日本で売っているんだから」ということで、優先権をエージェントに与えていました。それがこの 10 年くらいの間にオークション形式が主流になって、すべてが金で決まるということになってきています。そうすると、やはり資本的な余力があるところが勝ちます。お金で決まるという 1 例としては、みず書房は、去年来日したスピヴァクが出す予定の *Other Asias* の翻訳を出したい、と思っていました。しかしエージェントが翻訳出版権を数社で競争させ、そのときみず書房の提示した金額では相手になりませんでした。著作権と公共性の折り合うことのできる線はどこか、という問題はとても難しいことなのですが、アメリカは現在、著作権を著者の没後 70 年に延ばせ、と要求しています。このことを、

日本政府に対して年次改革要望書などで毎年のように言ってきています。近々そうになってしまうでしょう。しかし、このアメリカの言い分は、皆さんご存知のように、ほとんどがディズニー等を中心とする巨大メディアのロビー活動の結果であり、彼等の利益増進を図るだけのものです。このようなグローバルスタンダードというようなやり方とはまったく違ったところで、別の試みもあるんです。例えば本日いらしている編集者の一人が東アジアの出版社と付き合いながら、お互いの国内法を尊重しつつ、進めている動きだってあるのです。

最後に大学との関係に触れたいと思います。読者、著者、出版社、大学という4つの円を考えると、1960、70年代には著者と読者と大学がかなり重なり合っていました。つまり、著者の多くは大学人であり、それ以上に読者も大学人です。ところが現在は、大学と著者という枠はある程度重なり合っていますが、読者は大学の円の外にいます。これは60年代の団塊の世代の人を考えればいいと思うのですが、当時20代で大学に所属していた人達が、大学から離れて現在50、60歳になって今も同様に読書続けているが、この人々は大学の枠にいないわけです。しかし、現在20代、30代の人々は、60年代に読まれていたような本をなかなか読まないというのが現状です。

我々が若い頃は、著者と編集者が一緒に本を作ろうという関係がちゃんと作れました。著

者には、昔は自由な時間が多くありました。ほとんどの知識人は、大学に所属していても、くだらない教授会なんてものはサボっていました。要するにかれらは大学の組織の中でアウトサイダー的な人でした。全体の5%くらいの人達が、ぼくらと十分付き合うことのできるひとたちでした。夏休みを十分とってもらって、そこで本を書いていただいて、その著作活動を通して著者は社会と関わる。そういう仕事をしてもらっていました。

しかし、現在著者であるひとたちは、大学内行政に追われ、出版社と付き合ったり、執筆したりする時間がなくなってきています。何とか委員会という仕事や、「点検評価」の雑文を書かされるせいで、本来の研究や表現をする余裕がなくなってきてしまったようです。そういう現状の中で、今現実的な問題として考えているのが、先程述べた助成金の問題と、教科書の問題です。つまり、本が本屋で売れなかつたら直接著者にも買ってもらうなり、教科書にしてもらうなりしないと成り立たない。ここで質の問題が発生します。例えば、志ある人が専門論文を書いて、それを我々が見て、じゃあ本を作りますよかということになったとします。でも本を作るためには、助成が必要だとか、著者が何部か買い上げるとか、さらに何年間かは教科書に指定するとかということが出てきます。ともあれ著者と出版社の利害が一致して仮に本が出来たとします。それはその範囲においてはめでた

しめでたしかもしれないが、大事なのは、そこでは読者が不在だということです。

この人文書が売れない現状が簡単に変わるわけがない。かといって、質を問わずに売れる本を出せばいいというものでもない。publish or perish (出版か破滅か) であれ、publish and perish (出版したからこそ破滅) であれ、やはりパブリッシュのあり方を選択しなくてはなりません。これは大学のひとにとっては、さらに COE があると、成果や結果と称するものをでっち上げなくてはならないし、そういうものを出せるかどうかプロジェクトを継続して、引き続き競争の資金を確保できるかどうかになります。それがむしろ、自分たちの首をしめている。それが、我々が今苦しんでいるあり方とどこかで結びついてくると思うのですが、そういうことを含めて、考えていきたいと思います。

II 討議

岩崎：さて、色々な問題が出て参りました。フロアの方から質疑などありますでしょうか。編集の方々が今回の主題の主役でもあります。ぜひご発言をお願いします。

人文書をめぐる現状と新自由主義のアイロニー

A：私は、歴史学研究会関係の書籍を編集することがあります。歴史学研究会のとてもよいところだと私が思うのは、専門の分野や時代、地

域を超えて、お互い討論することができるし、成果を報告できることです。しかし、近年とりわけ研究が細分化され専門性が高まってきているなかで、かなり工夫しないと、「歴研的な」本は売れないんですね。自分の専門とは直接関係ない論文が多い、ということがあると思います。そのような諸々の論文を集めて本を作ったとしても、読者を捉えることが難しい。このような状況が続くと、本を出すのが非常に厳しくなると考えています。特に若い研究者は専門性に収斂した成果をどんどん出していかねばならないような状況になっていますが、とすると、ますます若い研究者の方たちと、自分の研究と他の研究とを繋げるような本をつくり、またそれが読まれる、という関係がなくなっていくように思います。読者がとてもハッキリしている専門書の場合には、こうした心配はないと思います。

B：私は、いまの「読者が見えなくなってきている」ということに関してみなさんにお聞きしたいのですが、80年代からの新自由主義教育の中で、学生が文化的なものを学習していく力が弱くなったということが言われたりします。これはどういうことなのでしょう。これが分かると読者というものが見えてくるかなあと思うのです。

岩崎：全てを説明することはちょっと難しいのですが、ぼくはこれは、複合的な要因で生まれた事態と思っています。その一つとしていわゆ

る「大学改革」は大きな影響を及ぼしているかもしれません。90年に大学設置基準が大綱化します。それまでは、大学における一般教養教育についても、「自然科学」と「人文学」と「社会科学」という3つの領域で、必ず大学生は一定の授業を取らなければならないという枠組みがありました。これ自体も大いに問題があったにしても、ともあれその強制の中で行われていた教養教育の授業は、大学設置基準を大綱化した途端に名実ともに瓦解したわけです。大綱化というのは、タテマエは「自由にやりなさい」というものですが、実際には文科省の顔色を窺がって、横並びに壊してしまった。それで、教養教育の空洞化にますます拍車をかけることになりました。その後の新自由主義的な再編の波に洗われている大学の中では、人文系の学問と基礎的な学問が冷遇され、予算も回ってこない。また、そもそもそういう分野のポストが減ってきて、学生がそれに出会う機会も小さくなっています。あらゆるところで、実用的な情報やノウハウを大学に求める風潮が強くなっています。

新自由主義教育と、大学生の学習力の低下については、ちゃんとした因果関係を証明することはできませんが、構造的複合的な問題が大学を襲っていて、これが今の現状を生んでいるということは間違いない。事態としては非常にアイロニカルなのです。学問に関しては「学問の専門性の壁を超えなくてはならない」とかいうことを文科省も言って、学際領域や複合領

域ということを頻りに主張するわけなのですが、しかし、そういう新自由主義的なプレッシャーにおいて起こることは、先程来出ていますように、研究者に余裕がなくなり、その結果蛸ツボ化してしまうわけです。また、蛸ツボ化したところにいる研究者というのは、たいてい自分の中に刷り込まれた制度的な学問スタイルに逃げ込むことをします。そうすると、研究者間のヨコの関係の対話が縮小していきますから、研究者全体の力が弱くなっていきます。

学問の蛸ツボ化を超えなければならないと言いながら、新自由主義的なプレッシャーが掛かると必ず逆のことが起きてきます。例えばCOEでも「大学の研究水準を上げていく」と言うのですが、実際にはそれぞれの人の研究が出来なくなるほどに、COEの中のタテマエの中での色々なことをやらされています。また、資金が湯水のように余る場所が生まれても、そこではその湯水の如くあるお金でできることがなくなっていく、あるいは一定の所に資金が集まりすぎて、その分野にはもう支援されるべき大学院生の数が足らなくなる。その他方で、他の分野では、貧しい大学院生がどんどん出てくることが起きています。

人文書をうけとめる社会的素地の不在について

B：私は小さな出版社を1人でやっているのです。先程お話にも出ましたが、本を作った後先

生に買い取ってもらったり、教科書にしてもらったりということをしてもらわないとやっていけないような状況があります。しかし、先生によっては「ぼくは学生に強制することはできない」とおっしゃる方もいる。それはそうなのでしょうけども出版社としてはそういうことをお願いでもしないとやっていけないという苦しい状況であることをわかって頂きたいわけです。著者と出版社でお互いに共闘してやれないものか、と思っています。新自由主義というものは、結局あらゆることを市場化しようとすることで、その結果起きるようなこと、つまり助成金をとって、合見積もりをとって三社で一番安いところにやらせるということは、まさに著者と編集者の関係をぶっ壊すということなわけです。しかしそうは言ってもお金がないとできない。そういうアンビバレントな状況に陥ってしまっています。

私には、この状況をどうやって突破したらよいか分かりません。正直言って、結局著者と出版社の間に、これは新自由主義者が最も嫌う言葉ですが、本当に徹底的に「馴れ合い」をするしかない。新自由主義者は「馴れ合いをなくせ」と言うわけですが、徹底的に馴れ合いするしかないのではないのではないかと、思うわけです。今の状況はそういうことではないでしょうか。C (平凡社) : 本を作る立場から一つ言いたいのです。今はもう月刊というペースでの出版はできなくなっていますが、平凡社選書というもの

がありました。昔のこの選書を見ると、初刷りで 5000 部くらい作って増刷を重ねるようなものもありました。例えば網野善彦さんの本はベストセラーになっていますが、その作り方を見ると、編集者の立場から見ると紀要論文を集めたようなものが平気で載っているんです。つまり、今の我々からみると、作れないし売れないものというのが毎月のように出ていて、結構な刷り部数があり、しかも増刷を重ねるものもある。

今は、大学の先生が主題を定めてコンスタントに書いた成果等を一冊の本にまとめて売ればちゃんと読者がいる、というようなやり方は難しいと思います。よくあるのですが、例えば博士論文を本にできないか、とか紀要をまとめたものを本にできないかという形のものは、よほどその著者の知名度がなければ、まず企画会議も通せないし、部数設定も良くて 1500 部で、値段も 5000 円を超えるような学術書しかつくれないわけです。これは、先程守田氏が言った、幅広い読者を目指して出版するという公共性よりも、限られた読者のためか、あるいは学位をとることに協力するというような話になってしまっているわけです。先程面白い言い方をなさっていましたが、それこそ「馴れ合い」みたいなものしかないように思うわけです。

では、かつて本が売れていた時代は、もっと積極的な本作りをしていて売っていたのかというと、必ずしもそうではない。一つには最近の

読者が、論文というものを読まなくなったということが言えると思います。平凡社選書のように基本的に大学の論文を集めたような本で、注をつけていました。しかし、現在新書形態での出版が増えてきています。著者からも「新書で出して欲しい」と言われることが結構多いです。私としては抵抗があって、ちゃんと注をつけたとか、紙幅が足りないのではと思ったりするのですが、著者の方からは、一夏で書き上げるには新書くらいでないと難しい、とか新書の方が読者を獲得できる、というようなお考えがあると思うのです。

そうすると大学の規範的な論文というものが、もうそのままでは商品化できないという事態があると思うのです。今であれば、網野善彦さんの論文をまとめた本は出版できるのか、売れるのかと思えるくらいに、ある意味で確かに越境的な読者も減っている。それに大学の規範の中で生産された論文が、単に内向きなものではなく、大きく展開していけるのか。そうした論文をキャッチするような社会的な素地はあるのか。そうした論文は出版物として成功できるのか、と非常に不安に思うわけです。ですから明確に読者を定めて書いたものか、一般読者向けに分かりやすく書いたものか、という両極端になってしまっていて、大学研究者がその専門分野から広い領域に向かって訴えかけているものが、うまく社会で受け止められない、流通させられない状況があります。特に人文書の出版に関し

ては、著者と出版社のどちらかが妥協しないと成り立たない。分かりやすく書いてくれとか、限られた読者のためのものだから助成金をなんとか用意してくれとか、教科書として作ってくれとしか言えない。これが実は、仕事をしていた寂しく思うことであり、辛いことでもあるわけです。お金の話か、売れるような本を作ってくれ、という話から始まる。研究者と編集者が本当にやりたいことを、緊密に組み合せてやる、ということがなかなかできない。そういう状況があるのではないのでしょうか。

「アイミツ」制度とその問題点

岩崎：先程から、合見積もりの問題が指摘されています。これは、学術振興会に学術成果公開促進費として出版助成を申請するときの問題です。今までは、学生が自分で申請していたわけです。しかし今は、出版社に見積もりを出させます。しかも、この見積もりを複数社から出させることを合見積もり、つまり「アイミツ」といいます。その複数の見積もり中から、著者と出版社の関係に関わりなく、一番安いところが採用されます。しかも学生や院生が所属している機関が申請するのであって、ますますプロセスが形骸化し煩雑になってしまいました。こうした混乱は今年度から始まっています。今までの話から言うと、先程Bさんが仰ったように「馴れ合い」路線でいくしかない、ということです。つまりは談合ですね。しかもこの談合も、何ら

かの形でメディアにスッパ抜かれると「左翼的良心的出版社の談合！」というように書かれて厄介なことになるわけですから、それもできない。そのために、そもそも人文系の大手会社、岩波書店のようなところは、この改悪とともに出版助成に関わることから手を引いてしまいました。ですから、助成をとって本を出したいと考えている当の研究者にとっては、状況はますます悪くなってきています。これは、今から本を出すぞ、という人たちにはもちろん切実な問題ですが、同時に人文系の出版社にとっても、出版という事業全体を支える信頼関係をむちゃくちゃにしてしまう事態です。

西山 雄二：私はその制度、つまり研究公開促進費に昨年度応募して本を出しました。前の制度の最後でした。2007年度から状況が変わったわけですね。一年遅れていれば、今の「アイミツ」問題にぶつかり、状況が異なっていたわけです。3種類の見積もり書を出して、一番安い見積もりが採用されたということを証明しろ、というわけです。申請者である学生にそうしろというのですね。これは学術振興会がいたずらに手続きを煩雑化、複雑化しているだけです。この分野での出版や、出版助成はもう何十年もやられてきていることなのですから、ある価格設定が高いのかそうでないのかを判断するのは常識の範囲で学術振興会にちゃんとできるはずなのです。それなのにこんな馬鹿なことを研究者の側に強いています。

もう一つのポイントは、所属の問題です。これまで、申請者である学生に直接お金が振り込まれて、学生はそのお金を出版社に渡すというプロセスでした。著者個人と出版社の関係だったわけです。しかしこれが所属先、大学機関によって行われなくてはならないとなったわけです。博士課程を終えたばかりの多くのひとは、一年ごとの不安定な非常勤職などについて、院生時代のような定まった所属がなくなっています。そこで、助成金の申請のためには、非常勤先の大学の教務などに頼み込んで、手数をかけてもらわなければならなくなります。しかし、この研究事業は、出版までに複数の年度にまたがるわけです。非常勤は、次の年の4月からもそこに身分があるかどうか分かりません。身分がなくなった場合、この事業はパーになります。つまり、不安定な身分にある人が本を出すということは非常に困難になっています。「アイミツ」を求めるというのも、市場原理に模した措置なのですが、これは著者、出版社両方にとってマイナスにしかならず、たんに申請者の数を減らすためだけに手続きを煩雑にしたとしか思えません。

岩崎：きっとこの件に関してだけは、学術振興会側もまだ動揺しているのではないのでしょうか。だから、強硬に反対すれば、うまくいくと撤回可能ではないかと思うんですが、どうでしょうか。実際に、学術振興会側にも競争的経費などに関して混乱が発生していますから、それこそ

人文系の出版社が連名で抗議して、国大教などでも動きがあれば、ひょっとすると現実を動かすことができるのではないかと考えています。まあ、それを学内で言う「それは活動家の発想だ」などと叱られてしまうのですが（笑）。

同じ様な状況で本を出した石原さんはいかがですか。

石原 俊：私は平凡社から去年『近代日本と小笠原諸島』という本を出したのですが、非常に難しいケースでした。千葉大で助教をしていますから、学長裁量経費が下りました。学術振興会のお金だと、専門性が高く刊行が不可能であり、一般の商業ベースでは刊行が不可能なものにしか助成金がでないのですが、この裁量経費ではそのような専門性に特化した本でなくとも商業出版ベースで出してもらうことができるわけです。私のケースでは、千葉大と著者である私の双方が一定額を負担することを条件に助成が出たのですが、結果的に総ページ数が500ページを超えたのにも拘らず1200部刷っていただき、価格も5000円に抑えていただくことができました。

現在、国から各国立大学法人に配分される運営費交付金を毎年1%削っていったCOEなどの競争的経費に回すという文科省の発想と類似したことが、大学内でも起こっていて、一般の教員の研究費を削ったお金が学長裁量や学部長裁量、研究科長裁量といった所に回されています。とりわけ千葉大のような中堅大学はこの傾

向が強いわけですが、これは逆手に取れる可能性もあって、人文系の研究者が「学長はそういうお金からどんどん出版助成を出せ」というような言い方で、お金を引き出してくるということができるかもしれないわけです。専任教員などとして大学に正規雇用されている人間こそ、学長などの所に偏在している資金を正常に循環させるというようなことをやっていくべきだ、と私は思っています。暗い話が多かったので、少し明るい話を、と思いまして話させていただきました。

商業ベースに乗せた論文誌

D：私はそれほど現状をネガティブに捉えてはいないのです。しかし、若い研究者、つまり30代くらいの研究者が大学の紀要以外で論文を書いていく媒体というものがなくなってきているのではないかと、とは危惧しています。膨大な出版数がある大学の紀要を全てフォローするのは難しく、結局私が読むのは、知っている著者だけ、となってしまっています。しかし、もうちょっと若い人が書いた論文を掲載するような雑誌が欲しいですね。注などはたくさんつけつつも、敷居を下げて評書とか教養書というか、新書的な雑誌でしょうか。助成金をとった上で作るようなものとは違う人文書、というものです。論文や研究書を常日頃から読んでいるわけではない層をも対象とした雑誌を商業ベースででせないのかな、と思っています。例えば月曜社さ

んから出しておられる『表象』などもあります
が。

是非お聞きしたいのですが、いわゆる現代思想系の雑誌は多いわけですが、ああいうものは読者が見えていますか？

小林：見えていません（笑）。

D：例えばスピヴァクという人がいますが、この人の著作は、最初、みすず書房さんの…

守田：そうです。最初は雑誌『みすず』にだけ載せるつもりでした。そこに出したものは、枚数が少ないから、最初は本にまでする気はありませんでした。

D：あの当時は、少なくとも私は、スピヴァクという名前を知りませんでしたし、社会的にもほとんど知られていなかったのではないのでしょうか。最初にあの人の著作が出てからもう10年くらい経って、その後存在感を増して本も5、6冊でて、一つの書店の中で大きな存在となったわけですが、例えばヴェルナー・ハーマッハーとか、サミュエル・ウェーバーの翻訳を出すときに、これが開く人文学の光景というものはどのようなものでしょうか。想定されている読者層についてもお聞きしたいのです。

出版の現場から —① 月曜社の場合—

小林：月曜社の本は、奥付を見ていただくと、神林が作ったのか、小林が作った本のかが分かるようになっていきます。今、ご指摘になった現代思想系の本は、比較的ぼくが作ったものが多

いです。本邦初訳、という本はたいてい悲惨な結果に終わります。誰も知らない、というように。

しかし、ぼくがサミュエル・ウェーバーを出したときには、『批評空間』で何本か論文が訳されていまして、『批評空間』を読んでいる例えば数千の読者の需要があるとする、数千のバイはあるのだらうと思っていました。サミュエル・ウェーバーの『破壊と拡散』という本は、エージェントを介さずにウェーバーとやり取りをして編集した本ですが、月曜社の本の中で非常に苦戦している部類のものになっています。

しかし、本邦初訳がぜんぜん売れないかという、そうでもありません。ポール・ギルロイという人の『ブラック・アトランティック』という本は、一昨年9月に出して、A5版で結構厚い本で、3200円するのですが、三刷まで重ねました。これは稀有な例です。この背景は、この著者は研究者であると同時にDJでもあるんです。それで音楽系の雑誌でも書評されて、ブラック・ミュージックが大好きな若い方が随分買ってくださいました。これがもし人文書だけに限定された読者層だとしたら、また悲惨な結果になったでしょうね。

ぼくは、書物は二度編集されると考えています。一度目は版元編集者が、モノとしての本をつくるその編集です。もう一つは数多刊行されている本の海に投げ出されたときに、一個の関係性としてグリッドを形成する、関係性としての書物。この時、書物を編集するのは、書店員

であり営業マンであり、販売の現場であるわけです。この現場での編集力は、落ちています。

90年代以降の出版不況で、人文書や芸術書の売り場が縮小されていっています。書店の中でも、人文書に力を入れてやっている人がいる書店は、全国でもそうなくなってきたのではないのでしょうか。そういう店舗が、この場に集まっていってしゃるような研究者の方々が書いた人文書を頑張って売っているわけです。そういうお店で積極的にアルバイトをしている学生さんもおります。本が売られている最前線でなにが起きているのか、書店での棚でなにがおきているのか、というのを是非見ていただきたいのです。

月曜社では助成金を取りません。というよりも、取れるような本は作っておりません。価格設定も安くするようにしています。その結果、ぼくも神林も月給 20 万を切るわけです。場合によっては半年くらい無給でやります。そういう場合、奥さんに食べさせてもらっています(笑)。同居していますから、毎日「どうもすいません。毎日おまんま食べさせていただいています。ありがとうございます」というのが現状です。色々言いたい事はあるんですが、戦い方というのはいろいろあって、自分の身を切るような形でやっていくというやり方も、零細出版社の場合にはあります。著者の方々には、販売の現場にももっと親しんで欲しい、編集者や書店員さんがなにをやっているのかをもっと見て欲しいのです。

出版の現場から ② 東洋書林の場合—

E:わたしは営業をしています。その立場から、今の話と繋げて、費用の問題を言いたいと思います。例えば 1000 円の本が一冊あって、それが売れたとき、本屋さんに入るお金は 200 円くらいです。雑誌であれば、1000 円なら 300 円でしょう。この売り上げから、本屋さんは水道代や光熱費から人件費まで、全てを出さなくてはいけないわけです。そうすると現実的問題として、本が好きであるだけでは本屋はつとまらない。加えて社員として書店員になる人は、自分がどのジャンルに配属になるかも分からないままに書店に入る場合もあります。しかもその人たちは朝から夜遅くまで働いているわけですから、本をゆっくり読む時間ありません。売り上げも少なく、時間もない中でもとにかく書店を回していかなければならないわけです。

普通は原価計算というものがあるわけなのですが、ぼくらは原価をはじきません。というのは、実際に売れる数で考えないといけないわけです。例えば 1000 部刷っていくら、という計算は全部売れきった場合の話で、1000 部刷っても 500 部しか売れなかったら仕方ないわけです。ですから例えば 10000 円の本が 1000 部売れたときでも、1000 円の本が 10000 部売れたときも、結局実質変わらないわけです。2005 年 11 月に、読者の獲得と金額の部分で勝負してみようと思ひまして、ウンベルト・エーコの『美の

歴史』という本を出しました。当初編集部から上がってきた原価計算が、一冊 12000 円で、そんなもん誰が買うんだと言って、ぼくは 8000 円で押し通したんです。通常の採算ベースとしては大赤字です。それでダメなら出さない、販売には自信があるんだ、ということで初刷で 2500 部刷って、3 ヶ月で売り切りました。その後、3000 部の重版をかけて 8 ヶ月で全て売り、現在さらに 2500 部の重版をかけています。ぼくは、誰が買うのか、どういうふうに販売するのかというのを最初にイメージして、年間計画を立てて、助成金があるのであれば使うし、無理だったらやらない。つまり、一点一点の本について、原価計算とかではなく、その会社が懸念していることに関してしっかり考え、どうしなければならないのか、ということを多方面から考えることができないと営業は勤まらないと思います。何かを知っているとか、何かができるとかでは営業は回らないわけで、今の会社の状態や実情がどうであるのかということを含めて、なにをやることができるのか、ということ認識して作っていかないとしくじったときに取り返しがつきません。自分達のやりたいことをやるために、かなりロジカルにやっていかないと今現在の出版社は成り立たないと思います。

先ほどの例では原価計算では 12000 円の本を 8000 円で売ったわけですが、つまりいくらの本であつたら何部売ればよいのか、という計算からはじめなければならないわけです。売れ

る数、で計算しないとダメなわけです。もし売れなかったときに、結局誰が責任がとるのでしょうか。結局誰も責任をとりません。著者も営業も編集も。結局断裁するしかなくなる。しっかりと計算をして作っていくことこそが、次のものを作る糧となっていくのだと思います。

学術出版の危機

岩崎：大学出版会として、いくつかの出版会からいらっしゃっていますが、どうでしょうか。

F：わたしも大学の出版局に属している編集者です。大学出版会と民間の出版社では、出版の発想が全く違います。大学出版会は、助成金をとっていることを前提にして出版をしています。アメリカなどでもレフリーをつけて企画のレベルを審査するという手順を踏みます。日本の大学ではこのような手順を踏んでいませんし、そのレベルを計ることは非常に難しいと思います。しかし、学術書を出すときには、レベルの問題も一緒に考えていかないといけないのではないのでしょうか。

今日のテーマである、新自由主義ということを考えてみますと、文科省は今の制度を導入したくて導入したのか、という問題があるように思います。つまり重要なのは財務省が今の日本の制度や財政の問題をどう考えているか、ということです。財務省が一番切り捨てたいところと言うのが文科関係の財源だと思います。この政策の流れは、本当に止めることができるのか、

私は非常に悲観的です。このまま行くと、助成金自体を出さなくなるということも考えうることです。分野を問わず、学術出版助成というものを廃止しようという流れにあるように思います。もし、助成金なしに人文等の学術書を出版するにはどうしたらよいのか、ということを考えると、今日の議論で想定されていた以上に状況は悲観的であるように思います。

今、30 幾つの大学出版会で部会を作っていますが、横の繋がりががあるので、どこの大学出版会が文科省の助成金をとって出版をしているのか、ということがだいたい分かるわけです。この情勢がここ 2 年ほどで変わってきていて、とても厳しくなっています。そして著者と編集者の関係と言うものはどんどん無視されていき、安い所に出版をさせようという発想に傾斜しています。先ほどアイミツの話がありましたが、それくらいで収まる話ではなくて、出版をする所は出版社ではなくてもいい、印刷屋でいい、という話になってきています。個人でやっているような小さな印刷屋さんに頼めば、今までアイミツをとっても 100 万もかかっていたものが、30 万でできますよ、ということになれば最終的にはそうになっていってしまうでしょう。議論をしている以上に、状況は深刻な方向に向かっているように思います。

ではどうしたらよいかというと、先ほど「馴れ合い」の話が出ていましたが、私は編集者の立場としては一種の開き直りでやっていくしか

ない、と思っています。これはあくまで編集者の立場でありまして、営業とかではありませんので (笑)。実際に、見積もりを立てて経営の利益を考えて本を作ることを考えると、ハッキリ申しまして本なんて作れません。全部売れた、と仮定して人件費やらを計算をしていたら、本の定価が高くなる一方です。今までのように、全刷り部数の内平均で何%売れるという見込みの計算とか、ページ単価でやっていくと、そもそも出版社は成り立たなくなっていくます。先ほど話で出たように、「この本を何部売るんだ」という発想からやっていかないと現実的にはできなくなっているわけです。見積書では、「1000 部売ればこのように利益がでますよ」と言いますが、「では実際には 50 部、100 部しか売れなかったらどうすんですか」という話なわけです。原価も回収できません。

もう一つ言うと、大学出版会というものには色々な形態があります。法政大学出版局のように財団法人であるところもあれば、慶応大学出版会のように株式会社である所もあり、さまざまです。その出版会の職員というのは、大学の職員であると言う場合もあれば、そうでない場合もあります。大学によってかなりスタイルが違います。法政大学出版局の場合は、大学からの出版資金に関する助成は一切ありませんが、オフィスや、本の倉庫の一部などとして市ヶ谷の所に場所を借りているわけです。大学とは独立した形で採算を取っています。だから、大学

の色々な仕事を手伝われるということもあります。大学によっては、大学の職員の一形態として出版会に所属するということもあります。

翻訳の話がでていたので、法政大学出版局にはウニベルシタス叢書があります。これは点数としては、もうすぐ900点に達します。年間に新刊を大体70点出して、そのうち30から40点はこの翻訳書シリーズですが、先ほどの版權の問題と同様に、事態は厳しくなっています。新自由主義ということかというと、たくさんお金を出してくれる出版社に版權をわたせば、自分達にも上がりがある、という風潮が出てきます。海外の出版社でもかなり統廃合が出てきています。大手出版社が、中堅どころの良い人文社会系の会社を買収するということが起きているわけです。そうすると、以前からの繋がりがどうなどとは言っていられなくなっているわけです。むしろ海外の版元が、最初から日本の大手の出版社にオファーを出していくようになるなんてことが起きています。翻訳を中心的にやってきたところは、現在非常に苦しくなっています。以前なら中小の翻訳出版社がやっていたような翻訳書を、大手の新聞社や講談社、集英社などの出版社がやるようになってきていて、それでは資金力が違うから版權を取る事はとてもではないができない。桁が一つ違うわけです。今、学術書を巡る競争、というのはこういうところでも起きているのだということを考えていただけたら、と思います。

G: わたしは株式会社という形態の大学出版会にいます。出版の仕事をしだしたのが新自由主義状況になってからですから、ここ10年ほどです。出版の内容ですが、非常に越境的なものをやっております。今の人文書出版というのは、人文系の一番面白いところを積極的にやっていないといけな状況なのかな、と思います。ですが、私はもう少し楽観的で、そこまで悲観的になることはないのでしょうか。

H: 私はフリーランスになって6年くらいの編集者です。前には大分小さな出版社に在りて、社長と私1人でした。そのとき助成金による出版をたくさんやっていたのですが、助成金の出版だけをやっていればそれでよい、ということ全然そうではありません。作ったからと言って売れるわけではありせんので。そうすると助成金で辛うじて紙代は出していたけども、給料がその本の売り上げからは全くでないということもありました。ですから、社長としみじみ言っていたのですが、助成金の本を出してかつある程度売れる本もださなければいけないなあ、と。それに今は過渡的な状況だと思うのです。どのように変わっていくのか分かりせんし、何かしらアイデアを出しながら仕事していかないといけない。例えば博士論文を出して、出版して就職も決まって「ああ良かった」と言うところで話は終わらないわけで、読者不在の本を作ってしまったら、それは結局自分達の首を絞めることになるわけです。今日、お話聞き

ながらこのようなことを考えていました。

東アジアの出版界状況

岩崎：日本での状況と同様に、東アジア全体で同じ様な問題を抱えていると思うのですが、ちょっと紹介するような形で、「東アジア出版人会議」についてご存知の方にご発言をお願いできますか。

C：今までの非常に現実的かつ厳しい状況のお話のなかで、ちょっと雲をつかむ様な話になってしまうのは憚れるのですが、取組みの一例としてお話ししたいと思います。東アジア出版人会議という取組みは2005年から始まりました。事の発端は、岩波書店の元社長の大家信一さんと、平凡社の出版局長であった龍澤武さん、みず書房の加藤敬事さんが、資金としてはトヨタ財団を使って、日本と韓国、大陸中国、台湾、それから独自の動きをしている香港、これらの出版人が集まって、年2回会合を開いています。これまで、東京、ソウル、中国の広州、台湾などで集まって、それぞれの出版の現状に関する情報を共有するということをしています。共有したからと言って、現状を突破するような具体的な知恵が浮かぶわけではないのですが、お互いの良質な出版物というのをそれぞれ翻訳出版しやすい形でできないだろうか、というような具体的な話も出ています。でもこれを自分の会社でいうと、逆に叱られたりするのです。なかなか難しい。

しかし、毎回ちゃんと雑誌のような形で交付資料も出しています。特に私としては、韓国の出版人との交流に注目しています。台湾も似てきているのですが、まさに本日の話でもある新自由主義的状況というのがあっちでもこっちでも進行している。一番進行しているのは日本だと思いますが。韓国は、大きな曲がり角に差し掛かっているのではないかと。韓国の出版業界の状況は、朝鮮戦争の後に壊滅的な状況でした。1950年代半ば以降から出版社が出てきたわけです。しかし、それすらも、強権的な政府の下で、自由な出版活動ができなかった。いわゆる民主化の後に、民主化運動の活動家が出版社を興したりしていて、90年代頃から出版社が活発な活動をするようになってきています。出版業界の方はご存知だと思うのですが、最近では韓国からのオファーがすごく多いと思うのですよね。「こんなに版權とってどうするんだろう」と思うくらい翻訳本を出しています。韓国は、市場としては日本よりは小さいわけですし、このような状況が長く続くとは思えません。韓国で人文書を競って出すというような状況は、すでにもう難しくなっていると思います。でも、そういうことに関して、韓国の出版社の方と話していると、日本人同士で話しているよりは少しは元気が出てきます。彼等も、今後厳しい状況になっていくだろうとは考えていました。日本の新自由主義的な経済状況の後追いをしていることは間違いない。ですが彼等と話している

と、ふさぎこむのではなく、前向きな気持ちにあらためて立つことができる、と思います。

それから東アジアにおける、歴史や思想といった問題を再配置していく課題が我々にはあるように思います。研究者の間では積極的にこういう主題に関してシンポジウムなどを日中韓で開いていますね。出版の中でも、歴史と言うことに関してお互い共有していける出版物、こうした主題に関する出版物がどのような配置をもって出版されているかということに関して考えたほうがよいのではないのでしょうか。我々はなかなかそこまで考えて出版することは難しいのだけでも。先ほど、小林さんが「本は二度編集される」と仰っていましたが、実はもう一度、本が書店ではなく書誌的に配置されたときに、日本ではどういう本がでているのか、韓国ではどういう本が出ているのか、と言うときに編集されているのだと思います。この時に、東アジアにおける歴史、政治と言うことに関して、どのように配置されているのか、ということに関して意識的でありたいな、と考えております。ある先輩編集者は、広い意味でこういうことを「読書共同体」と呼んでいます。如何にも理念的な考え方なんです。ある意味で一つの夢のようなものとして展望していきたいな、とぼくも思っています。今日のお話を窺っていて、この東アジア出版人会議に皆さんにも何らかの形で関わっていただけたら、と思います。

アメリカ的手法を疑う

鵜飼 哲：どうやって本ができていくのか、ということに関しては常に興味を持っておりました。実際に編集者として働いたことはないのですけども。編集者を経て研究者になった方の文章というのは、なんとなく分かりやすいわけです。著者も、読み手を想定して言葉を選んだりしていますし、ある意味では編集をしているわけです。

私は、アメリカのアカデミズムや書籍の生産技術の手法が世界化しているのだと思います。まあアメリカのやり方それ自体ではなく、それにネオ・リベラル的なドライブが掛かったものが世界化している。大学出版会一つを考えても、アメリカのやり方というのはそれなりの歴史的必然性がある、もともとあいうものであるわけです。それを、外国のうまく行っていない、例えば日本やフランスの出版界から見ると、多少うまく行っているように見えるという錯覚を起こしているようです。フランスもサルコジ大統領になってから、本人は英語ができないのですが「フランスはダメだからアメリカを見習え」みたいにやっていますね。私もここ2、3年アメリカに行く機会があって、私が関わった範囲ですが、シンポジウムなどに出てみて彼らの学術的レベルが高いのか、と考えてみると到底そうは言えないような現場はあったわけです。特に大学での一定のモノの書き方、表現の仕方、というのは、端から見たから余計にそう見える

のでしょうか、ほとんど鋳型にはめたように再生産されていますし、大学出版会でいうと、ある程度ページ数がないと出せないようなことがあるのか、膨らまし粉だけのような本が膨大に出ていたりするわけです。これで本当に生産的な知の営みがなされているのか、とうていそうは言えないというようなことがあるわけです。

ですから、今我々がこう考えると、どうしても過去を黄金時代と考えて、現在の時間をそこからの下り坂のようにイメージするわけですが、しかし以前のやり方に問題があったからこうなってきたのだ、ともいえるわけです。ですから我々が望ましい社会的な学問の生産のあり方というのを、現状の分析はそれとして、将来的展望に関して理想を描くのであれば、学生や研究者、営業に携わる方がせっかくこうして一堂に会しているのだから、共に構想していけるような場を作っても良いのではないかな。そういうものは、今私が関わっているような範囲でみると、ないように思います。

私が思うに、研究の場で研究者や大学院生ができることというのはこれからものすごくあるのだと思います。これだけ本があっても、事柄に即して言えば、ほとんど研究されていないことは膨大にあります。そういうことを研究することによって、社会に与えていける可能性は非常にあるわけで、人文学にはまだ研究されていない領域は膨大に残されているわけです。そういうところから、新たな出版の形を作ってい

ないといけないかなあと考えました。

学問をめぐる危機と形骸化の問題

戸邊 秀明：私は現在、とある歴史学会の委員をやっています。先ほど守田さんが四つの円があるとお話をされていましたが、大学に含まれるかもしれませんけども、実はもうひとつ学会という円があります。地方の国立大学では難しいですが、それに私的な研究会という場もあります。本を買うよろこびが得られるのは、この本を材料に議論するとこんなに面白いことが考えられるんだ、という驚きを共有できるそんな場があつてこそです。しかし、実際にはこれが出来なくなっている。人文書の中でも、比較的パイが大きくて再生産が可能だといわれている「歴史学」でもそんな状態です。

学部で授業でも深刻です。いま大学で「演習をやります。この史料を読みます」というと、学生はほんの少数しか集まらない。今までは、その集まった人でやって、読む楽しさを味わって育ってもらえばよかったのですが、例えば私が非常勤をしている早稲田大学の文学部(夜間)では、5人受講者を集めなければ、演習は開けません。実際それで開講できなくなったところもあります。つまり消費者がつかなければやらないわけです。いかんせん学生は、フィールドワークとかジャーナリストの人が来て一緒にできるようなものとかに行くわけです。こうすると学生に辛抱強さが育たない。考えてみれば、

論文、特に歴史の論文を読むのは、異様に苦痛な作業です。注と対照させながら読んで、さらにその注の先にどんな史料があるのかを想像しながら読まないで判定できないんですから。非常に想像力を要する、そんな不思議なことを机の上で延々とやっているわけです。もしこれが学生にはできないとなれば、こちらも非常勤の身の上ですから、参加者を見積もるためにテキスト、つまり教科書を選ばないといけません。しかも、学生はまだ生の史料を読んでも理解できないので、どこの本屋さんでも並べられている簡単なものでなくちゃならない。学生から「先生のテキストはなんですか」と聞いてくるわけです。そこである程度簡単な本を指定しないと演習に来ない。私のように「史料をプリントで配ります」と言うと、来ないんですね、これが。私が学生の頃は、本を買わせる教師の授業には行かないという慣習がありましたが、今はむしろ、ある程度の値段以下の「本」でないと行かない。何てことだろう、と思います（笑）。

今の話は大学内の状況ですが、最初の話に戻すと、もうひとつの円である学会が存亡の危機にあります。どの学会でも同じかもしれませんが、内実を暴露しますと、現在私が委員をしている学会に所属する人の年齢層で一番多いのは50代、60代です。この人達が退職して研究室がなくなると、本や雑誌を置く場所がなくなります。したがって買わなくなります。退会者も多くなります。これから院生になる人達で、そ

の穴を補填できるかという、できそうにありません。するとこの共同体を保持できなくなりますから、年次大会などに来て、自分の分野以外の人の研究と触れ合う機会も少なくなっています。院生についても、博士論文の完成まで、今はあまり回り道をして時間を掛けることは勧められなくなっているのも、効率の良い論文の書き方、専門に特化した書き方を覚えます。そうすると最新の専門的な論文しか読まなくなるわけです。この結果学会で起きていることといえば、投稿数は明らかに増えています。学振の特別研究員に採用されるために、業績が必要になるからそうなるんでしょう。でも採択率は低くなっています。今は論文を、教員とゼミの間たちが共同でチェックすることもなくなってきました。さらに私的な研究会での相互チェックもなくなってきたので、完成度の低い論文がいきなりポンと投稿されてくる。そうすると申し訳ないが返却するしかない。この結果どうなるか。事務処理は増える一方で、院生や学生の数は減っていく、重要な本を共有する機会も減っていく、人文系では院生は増えても「複合領域」とか、いっていい、いったいどうなっていくのかという、そんな絶望状況です。

長くなりましたが、ともかく大学だけでなく、大学と書店までの間にあってそれをつないでいた、非公的な領域がどんどんなくなっているということです。それを、教員や院生たちでどうにかして立て直していかないと、「本を出してく

れ」とは言えなくなります。それに、50、60代の人達がいつせいに退職されて、ポストも減っていく、となると非常に酷い状態になっていくことが容易に想像できるわけです。状況としては、非常に暗い話で申し訳ないのですが、こういうところではないでしょうか。

田崎 英明: 今のような話は、確かに前々から言われていたことでもありました。筑波大学ができたときもそうでしたが、大学が都心からどんどん離れて行って、学生がたまる場所がなくなってきました。今私がいる新座と言う所でも、周囲に何もなくて、学食は3時で閉まる。学生がたまる場所がないということは、先輩との深い交流がないし、先輩から本の読み方を学んでいくことができない。どう考えても、演習のときだけで本の読み方を教えるのは無理です。高校生のときに本を読んだことがない、と言うわけですから。週一回の演習で本の読み方を教えるなんてことは、どうあがいても不可能であるわけです。しかも、この間非常勤で行ったところでは、「教科書は1500円以下にしてくれ」とかね。まあいくつも授業をとって、高い教科書を買うようなことになれば大変でしょうから、分かるんですけどね。でもそうすると、新書くらいしか指定できない。新書だと詳しくできないが、かといって一回の授業で一冊とかもできない。かなり中途半端に終わります。しかし、新書を読んでから専門的な本を読ませる、ということになると半期では短いですね。通年ならよ

いですが。今は半期ごとですから。今は、半期13から15回、きっちりやれというお達しが厳しくなっているわけですが。しかし、もうちょっと余裕を持って半期10回で通年でじっくりやるというようにしないと。

「学生の質を保っています」ということを外向けにやるために、形式的でどうでもよいことをしっかりやるように言われていて、実質的に重要である、学生が自分から学ぶことができるような環境を作れる努力がないがしろになっているようです。しかも、教員に何らかの委員会に所属するようにさせているので、忙しくなってしまうことがあります。しかも今まで大学院がなかった所に大学院を作ってみたりしたのはいいが、ちゃんと大学院生を指導していく環境は整っているのかというところではない。それよりも、定員が1人増えると、お金がいくら増えるというような計算が先行している訳です。そんな環境の中で学生がちゃんと「学問は面白いんだ。本を読むことは面白いんだ」と思える環境が作れるのかということが疑問ですね。しかも学生が「学問は面白いんだ」と思えるときというのは、一つに教員が生き生きと教えていることが重要だと思うんですね。

学問世界における市場原理の不合理性と Humanity の再構成

西山: 書籍の話も重要なのですが、COE も重要で、第一期の COE が「21 世紀 COE」が 5

年間で終って、今第二期の「グローバルCOE」というのが始まりました。この中では、出版と言うのは研究成果の報告として重要な位置づけとされています。この「グローバルCOE」は、全国に12拠点あります。年間予算で言えば、6000万から1億5000万ほどは出ていると思います。そしてリッチなところは大変リッチです。そして大変綺麗な装丁で業績報告を送り合っています。そして私の場合は、先ほどの「即返」ではないですが、置く場所もないのですぐ捨てます。こちらからのものも捨てられているでしょう。壮大な無駄です。先ほどの守田さんの話で共感しましたのは、本というのは消費欲望型の新書でもなく、学者共同体や図書館だけに納められるようなものではない、本と言うのはその中間にあって自分のお金で買いたいものである、というところですか。ですから、助成金というのを活かして、そういう読みたい本を作って行きたい、そういうチャンネルを作って行きたいと思います。

先ほど *publish or perish* という話が出ました。これは一種のアフォリズムで、「出版できないやつは滅ぶ」ということだと思うのですが、実際には *publish and perish* つまり、出版しても出版しても倒産する。非常勤の人たちには、徹底的に論文を書くことを強要されて、体や精神を壊していつてしまう人も少なくありません。人文学というのは、ヒューマニティーということと人間性というものをどう確保していくのか、

ということの最後の砦だと思います。今年の「週間読書人」の巻頭鼎談で岩崎さんたちが、大学が人文学の最後の牙城となりうるのか、と問うていましたが、そういう意味では、新自由主義に対するヒューマニティーをどうやって確保していくのか、その場としての *publish, publication* ですね、本という形でどう切り拓いていくのかということが問われているのだと思いました。

岩崎：日本でも、新自由主義が席卷するようになってある程度時間がたち、当初の混乱とは言説の配置が変わってきています。携帯などによる日雇い派遣のようなシステムへの批判も、ようやくちゃんと出てきました。表現の仕方としては、格差社会、ワーキング・プアとかいろいろありますが、とにかく、新自由主義改革をしていく社会の破断点のはっきり可視的になってきている。しかし、その中でちっとも抵抗の動きを見せていないのは、大学だと思います。国立大学の法人化を押し切ったのは文科省でなくて財務省と経済産業省でした。文科省は当初抵抗していたのですが、抵抗しきれないと分かるとうり火事場泥棒に、ただ自分たちのポストを増やそうということだけで動きました。しかし、だめな文部科学省よりももっとだめなのが大学人たちで、抵抗や戦いが全くといっていいほど作り出せなかった。法人化以前の形に戻るようなことは決してないと思いますし、元の大学が良いいとも思いませんが、これほど全てのやり方を

「市場」という神に委ねるやり方、異様な速度で我々を走らせるシステムを、構造的に変革していく作業は、大学においてもこれから本格的に始められなくてはならないと思います。雨宮処凛さんに学べ、です。大学の内外でどんな共同性を作るべきか。その一つのキーワードは人文学かもしれないし、フマニタスという古めかしい言い方でもいいかもしれないが、有用性に縮減されない、しかも状況との関わりを見失わないような知の可能性をどう予感するのか。そういうことを、出版人と共同して考えていかななくてはならないと感じています。

【本コロキウム収録にあたって】

本コロキウムは、1月26日、WINC (Workshop in Critical Theories) 1月例会として、東京外国語大学海外事情研究所で行なわれたものです。お集まりいただいた編集者のみなさんは、特定の出版社に御所属であったり、あるいはフリーランスとして一定の仕事に従事されたりしています。そうした事情を鑑みて、報告者の三人を除いて、発言された編集者のかたがたのお名前を匿名にさせていただきました。それ以外の方については、そのままお名前を出してあります。その結果として、奇妙に不完全な匿名座談会風の記録になったかもしれません。しかし、固有名はすべて明示されていくとも、そこで論じられている論点は十分に意義のあるものになっているのではないのでしょうか。ただし、テープ起こしで聞き取れなかった箇所、重複を省略した箇所、発言を

意味が通るように文脈的に補足した箇所もありますから、この記録の文責は、最終的にクアドランテ編集委員会にあることを、最後に明言しておきます。

(こやなぎ あきこ・フリーランスの編集者)

(こばやし ひろし・月曜社取締役)

(もりた しょうご・みすず書房編集者)

(いわさき みのる・東京外国語大学)